

野間宏『真空地帯』と国民国家論

——国民化される肉体の裂け目——

内藤由直

1. はじめに

本稿は、西川長夫が終生に亘って取り組んだ研究テーマの一つである戦後日本文学の中でも取分け高く評価した野間宏の『真空地帯』を再読しながら、西川が提起した国民国家批判論の射程を測ろうとするものである。

野間宏の小説『真空地帯』は、「真空ゾーン」の表題で物語全体の約三分の一の導入部分が雑誌『人間』（1951年1～2月）に掲載された後、大幅に増補され、書き下ろし長篇小説シリーズの単行本『真空地帯』（河出書房 1952年2月）として刊行された作品である。初刊本にはハードカバーの上製本とソフトカバーの普及版の二種類があり、普及版には「附録 批評集」が挟み込まれている。

日本の軍隊における内務班の日常を描いた本作品は刊行後、大きな反響を呼びベストセラーとなった。普及版に添付された「附録 批評集」には各種新聞雑誌等に掲載された同時代評や読者の感想が収録されているが、その中で例えば小田切秀雄は、「戦争文学はあるが、軍隊そのものを描いた小説は、プロレタリア文学時代に黒島伝治・立野信之・長澤佑たちの若干の先駆的試みがあるほかには全くのタブーとされてきた。人間性が呼吸することのできない「真空」な地帯としての日本軍隊の日常生活（内務班生活）の異常さを憤怒と苦悩とによつてつぶさに芸術的に描きだしたほとんど最初の作品がこの『真空地帯』である」（「小田切秀雄氏評」『真空地帯 附録批評集』河出書房 1952年、初出は「野間宏『真空地帯』の問題」『文芸』1952年5月）と絶賛の言葉を呈している。同時代評では他にも、「このくらい多くの平凡な些事を書いて、スリルと緊張を感じさすもの、そして読者のなかに、強度の批判精神をよびおこさずにおかないものは少いだらう。たとえば、天皇という字を一度も使わずに、旧天皇制に、このくらい手痛い批判を向けたものは、戦後おそらくあるまい」（手塚富雄「野間宏著『真空地帯』」『中央公論』1952年6月）、あるいは「日本の悪と歪みは軍隊のなかに集中的に表現されてゐるとはしばへ云はれることだが、それをこのやうに生々しく、「真空地帯」の背後にくつきりと「日本」を浮き上らせて描いた作品はない」（那須國男「書評 真空地帯（野間宏著）」『三田文学』1952年8月）と好評を博している。こうした評価は枚挙に遑が無く、『真空地帯』は、当時の読者の圧倒的な支持を受けたのである。

では、『真空地帯』の何が、それほどまでに読者を、そして、西川長夫を魅了したのか。本稿では、作品が喚起する問題を振り返るとともに、本作品を今、現在において読むことの意義を西川長夫の国民国家批判論を敷衍しながら検討していく。

2. 共有体験としての「真空地帯」

『真空地帯』が当時の読者を魅了し、強い支持を集めた理由は、当時、これを読んだ者の多くが、実際に「真空地帯」である兵営の内務班生活を経験していたからである。その「真空地帯」の様子は、作品の中で次のように描かれている。

兵営ハ苦楽ヲ共ニシ死生ヲ同ウスル軍人ノ家庭ニシテ兵営生活ノ要ハ起居ノ間軍人精神ヲ涵養シ軍紀ニ慣熟セシメ鞏固ナル団結ヲ完成スルニ在リ

これは軍隊内務書の綱領の一にある文句である。兵隊は初年兵のときどうあろうとこれをおぼえこまされ、暗しうさせられるので、それはいまでも曾田の口のなかにある。しかし曾田はそれを次のようにおきかえている。

兵営ハ條文ト柵ニトリマカレター丁四方ノ空間ニシテ、強力ナ圧力ニヨリツクラレタ抽象的社會デアル。人間ハコノナカニアツテ人間ノ要素ヲ取り去ラレテ兵隊ニナル

たしかに兵営には空気がないのだ、それは強力な力によってとりさられている、いやそれは真空管というよりも、むしろ真空管をこさえあげるところだ。真空地帯だ。ひとはそのなかで、ある一定の自然と社会とをうばいとられて、ついには兵隊になる。

曾田は毎日一丁四方のなかをぐるぐるあるくのだ。そこには山もないし、海もない。しかしそこには、女がなく父母兄弟がない……そしてその代りに人工的な山や海があり……また人工的な父母、中隊長と班長がある。そこでは屋内で帽子をかぶることは許されないが、屋外へでるときは帽子なくしてでるということはまた許されない。これは一つの強制せられた社会である。そこではまた起床後より夕食時限までは寝台上に横たわることを許されないが、これは人間の自然をうばい去ることである。

(野間宏『真空地帯』河出書房 1952年。以下、作品本文の引用は本書に拠る。)

この場面は、主人公である木谷一等兵と並んで重要な人物として登場する曾田一等兵が、兵営の本質が「真空地帯」であるという独自の軍隊観を述べる部分である。ここでは、約百メートル四方の閉鎖空間の中で、人間が真空の強力な陰圧によって「人間ノ要素」・「人間の自然」を身体から奪い取られ、兵隊として形成されていくことが語られている。その兵営の中では、厳格な規則が兵隊たちを拘束しており、上意下達の命令によって自らの意思を棚上げして行動しなければならない。曾田はこうした非人間的な「真空地帯」を打ち破ることのできる可能性を陸軍刑務所帰りの主人公木谷に見出そうとするが、物語の結末では、兵営の規則に抗い脱走を企てる木谷でさえそこから逃れられず最終的に野戦送りとなり、「真空地帯」は無傷のままに残存することとなる。

このような兵営内部の描写は、読者に過去の記憶を想起させ、強い共感を覚えさせた。本作品を読んだ者は、例えば、次のような感想を述べている。

○自分も軍隊生活を体験したが、まざまざと本書を通じて当時の物的・人的兵隊生活を回想した。人間の頭脳を真空化する軍隊、今更ながら悪夢の思い出である。`真空地帯、は

現在も随所に存在し人間を真空化せんと構えていると思う。（加藤新氏 二十六才・炭坑夫）

○文句なしに感激しました。本書中の人物と同じ生活を体験して来ている私にとつては一つ一つ思い当り共感をおぼえます。またぞろ再軍備が云々されて来ている今日、本書の持つ意義は大きいと存じます。（柴英雄氏 二十八才・地方公務員）

（いずれも「読者のこえ」『真空地帯 附録批評集』河出書房 1952年より）

読者の多くは自らの戦時中の体験と照らし合わせて本作品を読んでいたものであり、『真空地帯』は当時の読者に戦時下の自己の生活を強烈に思い起こさせる圧倒的なリアリティを以て迫ったのである。

もちろん、読者の全てが軍隊生活を経験していたわけではない。けれども、「我々のように軍隊生活を経験した事のない者でも、如何に当時の軍隊が出タラメであり又、人間を人間とも思わぬ処であつたかと云う事が、実ははつきりと見る事が出来ました。この書は我々の様な二十代の青年に是非読んで貰いたい。（北村恒雄氏 二十一才・事務員）」（同前）と述べられているように、軍隊という特殊な場所がいかなる状況であったのかを活写する本作品は、軍隊生活を経験していない者にも鮮烈な印象を与え、柵に囲まれ不透明な場であった兵営の内部を生々しく想像せしめたのである。

3. 二つの論争

内務班のリアルな日常生活を描き出した『真空地帯』は、前節で見たように多くの読者から称賛を浴びた。しかし、一方で辛辣な批判をも被り、作品を巡る論争へと発展していくこととなる。

『真空地帯』へ向けられた批判の中でも、最も鋭く作品に対峙したのは、大西巨人の一連の批評であった。大西が『真空地帯』に見出される致命的な問題として取り上げたのが、作品で描出される兵営の位置付けであった。

大西は、『真空地帯』で描かれる兵営が社会から隔絶された特殊な場として位置付けられていることに疑問を呈し、兵営は社会の一部であり階級対立を含み込む一般社会と密接な関係を持った場所であること強調する。

『真空地帯』には作者の主観に必ずしもよらない・無意識的な・しかし客観的な俗情との結託がある。云いかえれば、作者の不明・誤解・くそまじめが結果として俗情に荷担し、「俗流大衆路線」に足をさらわれた形になつているのである。すでに『真空地帯』という題名の選択・決定の由来がこの間の消息を雄弁に物語っているであろう。

『軍隊内務書』の「綱領・十一」には次の一文があつた。

〈兵営ハ軍隊成立ノ要義ニ基キタル特殊ノ境涯ナリト雖社会ノ道義ト個人ノ操守トニ至リテハ軍隊ニ在ルガ為ニ其ノ趨舎ヲ異ニスルコトナシ（後略）〉

兵営ないし軍隊を「特殊ノ境涯」として規定し成立させようとしたのは、ほかならぬ日本支配権力・帝国主義者であつた。（中略）かくて兵営は言葉の世俗的な意味に於いてはま

さしく「特殊ノ境涯」であつたが、その真意に於いては決して「特殊ノ境涯」でも別世界でもなく、日本の半封建的絶対主義性・帝国主義反動性を圧縮された形で最も濃密に実現した典型的な国家の部分であり、自余の社会と密接な内面的連関性を持つ「地帯」であつた。(大西巨人「俗情との結託」『新日本文学』1952年10月)

大西によれば、兵営を「真空地帯」として、それを取り囲む社会とは質的に異なる「特殊ノ境涯」として把握することは、国家権力に同調し、その権力による支配を無意識のうちに敷衍することに他ならない。真空の陰圧によって「人間ノ要素」・「人間の自然」を身体から奪い取られるという独自の兵営観を表現する『真空地帯』は、その兵営こそが人間によって構成され、支配・権力という国家の中樞を維持するための様々な画策が常時、実践される社会であることを見逃しているというのである。そして、軍隊及び兵営を特権的な場として認識する俗情と結託した『真空地帯』は、そのことにより社会変革のための抵抗の契機を逸していると厳しく指弾する。

兵営を「特殊ノ境涯」とする上からの規定は、そこでの半封建的絶対主義性・帝国主義反動性の高度な実現を容易にするためのずうずうしい方式であり、その実現に対する人民大衆の抵抗の封殺・排除のための臆面もない手段であつた。従つて兵営を言葉の本質的な意味に於いて「特殊ノ境涯」と認めることは社会的現実の重大な誤認であり、世俗的な意味で同様に認めることは軍国主義的絶対主義に対するたたかひの放棄・屈服以外のものではなかつたし、ない。日本支配権力に対し多かれ少かれ宣戦し抵抗した精神は、前後いずれの意味でも兵営をこの世にあり得ず・またあるべきではない「特殊ノ境涯」と認めることを——公然とであるか心中ひそかにであるか——断じてがえんじなかつたであろう。

敗戦と共に一応消滅した・そしてその消滅が永久であることが心から願われる日本帝国主義軍隊・兵営を今日の見地から批判的に描くに際して、それを「特殊ノ境涯」と認める立場に依ることは、重大な不十分であり、帝国主義反動への見逃しできない譲歩であり、——許されぬ俗情との結託であると云わねばならない。

(同前)

『真空地帯』に対するこのような否定的評価は、佐々木基一なども加わり、作品の価値を巡る論争となっていく。野間自身も大西の批判に応え、さらに大西が再批判を加えるなどして、後に「『真空地帯』論争」と呼ばれる一大議論に発展していくことになる¹⁾。

作者である野間は、反論の中で、大西たちの批判全てが的外れであることを指摘し、『真空地帯』では国家と社会を区別しており、国家の最も暴力的で特殊な装置として軍隊を捉えているのだと反論する。野間は、次のように述べている。

大西巨人氏、佐々木基一氏の二人に共通している点は、軍隊は特殊の地帯ではなく社会の縮図であり、しかも典型的な縮図であると考えている点である。そしてこれは私の軍隊に対する考えとは根本的にちがっている。(中略)

たしかに日本の軍隊は大西巨人氏のいうように日本の国家の部分である。しかしそれは国家の部分であるが故に特殊の団体なのである。私は決して軍隊が国家の部分であることを否定していない。ただ国家と社会との区別をしているだけである。ところが大西巨人氏は国家と社会との区別をすることが出来ず、さらに社会を階級対立のある社会として考えることができないのである。大西巨人氏は社会を階級社会としてはっきりみることができないために、支配階級の機関である国家と被圧迫階級との間の関係が内面的連関性の関係ではなく敵対的な関係であるということを明かにすることができない。それ故に大西巨人氏は軍隊が国家の部分であるということから、ただちに、それが自余の社会と密接な内面的連関性を持つものであるなどと考えるにいたるのである。軍隊と内面的連関性の関係を持つのは国家であり、従ってさらに支配階級であって、被圧迫階級ではない。被圧迫階級にとっては軍隊は敵対的な存在であり、全く非人間的なものなのである。

（野間宏「日本の軍隊について」『野間宏作品集第一巻』三一書房 1953年）

大西は軍隊及び兵営を民衆をも包含した一般社会の縮図として把握しているのに対して、野間はそうではなく、軍隊及び兵営は何処よりも非人間的な場所であり、民衆と敵対する支配階級の一機関であることを強調するのである。

この論争は、決着がつくことはなかったが、軍隊の本質をどのように認識するかという重要な観点を提示している。大西は、軍隊の内部にこそ階級対立が存在することを前提に置き、軍隊は外部世界と密接な繋がりを持った社会の縮図であると考えている。一方、野間は、軍隊が支配階級を利する一機関であり、『真空地帯』で描き出したように人々を抑圧する権力機関に他ならず、その本質を捉えるためには一般社会とは異なる軍隊の特殊な機能を明らかにしなければならぬと考えているのである。

ところで、『真空地帯』は、上記の議論とは別に、同時代のもう一つの論争に巻き込まれていく。それは、戦後国民文学論争である。

戦後国民文学論争は、竹内好による問題提起によって生じた近代日本文学最大の論争である。議論が起こった直接の原因は、サンフランシスコ講和条約によってアメリカ軍による占領が終わった後も、日本への支配が継続される状況に対して、抵抗のナショナリズムを文学によって組織しようとしたことにある²⁾。国民文学論争では、アメリカ軍に対する抵抗という目的を達成するために、日本人の国民的団結を強固にする文学作品の創出が求められた。同時に、近代日本文学の伝統を継承する既存の作品の中で、どの作品が国民文学に相応しいかを議論した。そこで、国民文学としての可能性を検討された作品こそが、この『真空地帯』であったのである。国民文学論争の中では、『真空地帯』を巡って、次のような議論が交わされていた。

蔵原 野間君の場合は判りにくいと言うけれども、「真空地帯」では国民文学的方向に努力して、発展していると思うな。

桑原 それは賛成だな。「真空地帯」はずっと読みやすくなっていると思います。ところが佐々木基一君とか、ああいう人が、あれは生温いといっているが、そういう批判の仕方は問題だと思いますね。

(中略)

野間 僕の文学がいろいろ問題になりましたが、私の以前の発想、方法が国民文学と切り離れているとは考えられない。以前の方法だけでは国民文学へたつすることはできないが、しかし以前の方法をすててしまえば、また国民文学へたつことはできないと考えます。

(座談会「文学と日本の現実」『改造』1952年12月)

上記は座談会における蔵原惟人・桑原武夫・野間宏の発言であるが、ここで蔵原は『真空地帯』が国民文学的作品としての可能性を持っていることを高く評価しており、桑原もそれに同意している。作者である野間自身も、創作の過程において国民文学創造の意志を持っていたことを示唆しており、同時に「作家がやはり国民全体の問題を知らない。作家が国民になれないというところに問題がある」(同前)とも述べ、現代作家は同時代の国民的課題を背負い、国民の一人として創作に従事すべきであることを強調する。

もちろん、『真空地帯』を国民文学として評価することは難しいという主張もあった。井村紹快は、「野間氏が軍隊生活の中で絶えず批判性を失わず抵抗して来たことが、兵隊を兵隊の独特さにおいてとらえる、というこの作品の成果を生み出したのでありましようが、それと同時に、自分は抵抗したのだという意識或いは誇りのようなものが、官僚機構を打倒してゆく根源の力を本当に生き活きと掴むことを防げたのであります。本当に人間をリアルにつかむためには、私たちの最後の誇りすら否定し尽してしまうような、残酷な厳しい自己否定がなければならぬ」(「『真空地帯』をめぐって」『日本文学の伝統と創造』日本文学協会編 岩波書店 1953年)と述べ、作者に備わる知識人としての特権意識を批判している。井沼は、そうした特権性を纏った作者の主体性を批判し、知識人と大衆との一体化が不十分であることを『真空地帯』の瑕疵として指摘する。そして、「『真空地帯』の作者の場合も曾田の観念性や木谷の野性にもみこだわる狭さを否定しつき破るときに、この作者からもっと力強い「国民文学」的作品を期待出来るのではないのでしょうか」(同前)と、徹底的な自己批判の果てにこそ、真の国民文学が可能であると述べるのである。

こうした批判があった中で、当の野間自身は、国民文学の概念を次のように具体化していた。

私たちの創造しようとする国民文学は日本民族がサンフランシスコ条約以来、全く奪われてしまった自分の国を取り返し解放して行くというたたかいのなかで生みだされてくるものであるということ、このことはいつもはっきり考えられていなければならないことである。国民解放、それはナチス占領軍からフランス民族を解放し、また日本帝国主義から中国民族を解放した国民解放と同じように、アメリカ軍から日本民族を解放するたたかいである。それ故に私たちの国民文学はこれらの国民解放文学がレジスタンス文学とよばれるように、あくまでもレジスタンス文学抵抗文学なのであり、このことを置いて国民文学を考えようとするとき、また私たちは全く道を失うことになるだろう。

(野間宏「国民文学について」『人民文学』1952年9月)

野間は、「国民文学という場合は、やつぱり読んだ人が、レジストするというそれだけでなしに、自分の行き方がそれを読んで、可なり判りやすくなる、新しい行き方がとれる、こういう面が非常に必要なわけでしょう。レジスタンスの正しい行き方、それを充分出すことが必要です……」（「文学と日本の現実」前掲）とも述べている。国民の間で広く共約し得る経験によって集団の結束力を高め、現前の敵に抵抗していくことこそが野間の考える国民文学の意義なのである。こうした国民文学概念を念頭に置き執筆された『真空地帯』は、かつて自分たちを抑圧した軍隊の経験を基にナショナリズムを強固にし、現在において対峙しているアメリカの軍隊に国民一丸となって抵抗していくことを目論んだレジスタンス文学であったと捉えることができるだろう。

4. 軍隊とナショナリズムの問題

『真空地帯』を巡るこれらの論争を振り返ることで、二つの問題が浮かび上がってくる。第一は、「『真空地帯』論争」で提起されたように、「軍隊」もしくは「兵営」の存在をどのように把握するかということである。そして、第二に、国民文学論争で検討されたように、作品が同時代の反米ナショナリズムを喚起するための起因の一つとなっていたということである。

当時の読者の多くは、「軍隊」ならびに「兵営」を、かつて自分自身が所属していた場所として認識し、そこで経験した困苦を思い起こしながら作品を読んでいた。そこは、大西巨人が指摘したような半封建的な主従関係や階級対立があり、「自余の社会と密接な内面的連関性を持つ『地帯』であつた」（「俗情との結託」前掲）ことは確かであるだろう。けれども、職業軍人ではない多くの人々にとって、「軍隊」や「兵営」は、日常生活から一時的に隔離された上、死に至る道行という非日常の経験を強いられた場所であつたはずである。『真空地帯』では繰り返し、死の危険を伴う「野戦行き」の人選を巡って兵隊たちが疑心暗鬼に囚われている様子が描かれている。また、陸軍刑務所帰りで上官への復讐心に燃え、上等兵であっても殴り倒す主人公木谷でさえ、「野戦へ転属になるということがおそろしかった」と、兵営から実弾が飛び交う戦地へ送り出される事態に恐怖を覚えているのである。

本稿は、兵営が死に至る通路であつたという点で、大西よりも、野間の軍隊観・兵営観の方が、当時の読者がおかれていた状況と、より具体的に重なっていたのではないかと考える。例えば、四年余りを内地部隊の兵隊として過ごしてきた猪野謙二は、『真空地帯』を評して、「作者の逞ましい、執拗な表現力が、むしろそのディテールの端々によつて、私の心理や生理の深層にこびりついている様々の記憶の断片をつつき出し、目ざめさせ、あるいはそれをめりめりと引き剥がしてゆくことに、痺れるような興奮を感じながらこの作品を読んだ。そして読みながら、こんな読みかたをしているものは、けつして私だけではないだろうと思つた」（「野間宏著『真空地帯』」『近代文学』1952年6月）と述べている。猪野は続けて、「『条文』と「一丁四方の塀」に囲まれたその稀薄な空気の中では、誰もかれもがひもじくなり、どんらんな食欲と獣慾とにさいなまれ、猜疑と不安に駆られ、醜悪な利己心と利己心との葛藤が間断なくくり返される。一方の出口はいつも致命的な「野戦」に向つて開き、他方の出口は当てにならない「外出」と「満期」とにつらなつていただけだ」（同前）とも記している。真空の圧力を保つために、「兵営」

と外部との通路は、著しく狭く制限されている。そこから逃れるためには、実戦へ出るか除隊しかない。だが、作品の主人公木谷が除隊を目前にして野戦へ送られたように、一兵卒が野戦行きか除隊かを選択することはできない。どちらに向かって出て行くかは、上官の匙加減一つで変わるのである。

兵隊たちにとっては、当てにならない除隊よりも、死の危険を伴う野戦行きの出口の方が、広く、そして、時には魅惑的に開いているように見えたかも知れない。戦後、「私は補充兵であるが、はいつたところは「三七」（歩兵第三十七連隊、或は中部二十三部隊ともいう）である。この連隊は「気合がかかっている」という点で有名で、その私刑はかなりなりひびいていた。そして私は北部営庭できびしい訓練をうけながら、東の方にみえる大阪府庁の建物を見つめ、はやくここから出られたらなあと思ったものである」（野間宏「『真空地帯』大阪公演によせて」『毎日マンスリー』1953年5月）と述べるかつての兵隊も、入営中は「野戦へ行きたい気持あり、新しい生活を立てかえなければならぬ、又新しい体験を、つくらねば生きて行けない。新しい体験によって、再び自己が形成される日をまつのみである」（野間宏「手帳7-1」『作家の戦中日記 1932-45 下』藤原書店 2001年）、「野戦に行くことによって、自分の道も、少しはひらけるかも知れない。自分の道が、新にひらけるのは、この他にないかもしれない」（同前）と、現状の閉塞感から脱却する可能性を野戦での戦闘に見出していた。兵営は、生命の危険を賭してでも脱出したいと思わせる特異な場であったのだ。

井上正蔵が述べるように、「日本軍隊の内部には本質的な抵抗の組織というものが全くなかった」（『『真空地帯』についてのノート』『真空地帯』旺文社 1972年）のであり、「組織のないところに運動は存在しえない。したがって、そういう組織の全然ない日本軍隊の兵営から真の抵抗運動も生まれようがない」（同前）のである。即ち、兵営は、決して階級闘争を実践できるような場ではなかったのであり、一刻も早く逃れたいと思わずにはいられない場であったのである。

それでも頑なに大西巨人が『真空地帯』を指弾しなければならなかったことには、作品発表時のコンテクストが深く関わっていると考えられる。佐々木基一は、大西巨人も実は『真空地帯』を絶賛していたことを後年、明らかにするとともに、次に見るように、にも関わらず厳しい批判を向けざるを得なかった当時の状況について言及している。

佐々木 『真空地帯』が出たとき、僕は本当は感心したんだよ。それで、僕はちょうど「近代文学」の編集をやっていたから、野間君に「近代文学」に「『真空地帯』を完成して」という文章を書いてもらったわけだ。そうしたら、みんなが手放して、無条件に『真空地帯』を褒める。（笑）どうもそれがちょっと気に入らなくてね。

もう一つは、「人民文学」と「新日本文学」の関係がありまして、今考えると、僕の『真空地帯』批判のモチーフも、あの当時の共産党内の政治路線の対立の中にちょっとまきこまれた点がないわけではないので、いまとなってはちょっと自己批判しなきゃいけない。（笑）（中略）

佐々木 大西巨人は最初に僕のところに来て、『真空地帯』を絶賛したんだよ。（笑）

小田切 かれは実際に対馬での重い兵隊経験があるから、そうだったろうと思うよ。

（佐々木基一・小田切秀雄・小田実「野間宏・文学と思想」『群像』1991年3月）

作品を絶賛しているにも関わらず『真空地帯』を批判し、否定しなければならなかった背景には、当時の『人民文学』と『新日本文学』との対立という問題があり、その原因である主流派（所感派）と国際派との間で繰り広げられた1950年代の日本共産党の分裂問題が横たわっていたのである。つまり、『真空地帯』の軍隊観・兵営観を指弾し、そのことによって作品を丸ごと否認していったのは、当時の文学者たちを巻き込んでいた政治的状況に問題の原拠があったのだ。

一方、ナショナリズムの問題も、当時の政治的状況と不可分の関係にあった。野間は、アメリカ軍への抵抗とともに、50年代の再軍備の流れに抗うためのレジスタンスを惹起する一つの切っ掛けとして、『真空地帯』が読まれることを希求していた。

日本の軍隊のほんとうの姿、内容をとらえるということは、兵隊として戦争に出された私の長い間の念願であった。私はそのなかに兵隊として苦しい生活をつづけた何百万の人人のふかくひめた心を描こうと思つた。日本の国民が正しく雄々しく前進するためには、戦争中の自分の姿をあやまりなくふりかえり、いつわりの言葉をもつて国民と戦争と軍隊にとじこめた人たちにたいして、いまこそ、打撃の声をあげなければならないのである。戦争中まだ小さくて軍隊の何たるかを知らない若い人たちにも、すでに再び「真空地帯」にのまれる危険がせまつているとき、ぜひ、読んで下さつて日本再軍備に反対するはつきりした決心を持つて頂きたいと思う。私はこのような思いを、一つの大きなロマンのなかにこめようと思ひ、ようやくそれをはたすことができたと思うのである。

（野間宏「作者のことば」『真空地帯 附録批評集』前掲）

前述したように、『真空地帯』の読者の多くは、自己の経験を想起しながら作品を読んでいた。そこには、軍隊生活という一定の集団間において共有できる、同じ経験があった。野間は、その経験を、軍隊を知らない者にも敷衍していくことによって、国民全体の共通経験を想像的に創り出し、それによって喚起されたナショナリズムを原動力として、逆コースと呼ばれた当時の政治状況に抵抗していこうと考えていたのである。つまり、ここでは『真空地帯』という作品が、抵抗のナショナリズムを組織化する一つの再生産装置として機能していることが看取できるのである。

このように、『真空地帯』という作品は、50年代の共産党分裂問題や逆コース、そして亢進するナショナリズムといった政治状況の渦中に巻き込まれ、読解されてきたものであると一先ずは位置付けることができる。では、本作品は、そうしたコンテクストを離れて読み解くことはできないのだろうか。

5. 国民国家への／からの通路

作品発表時の政治的コンテクストに囚われ続けていた『真空地帯』読解に対して異を唱え、作品の表現そのものを読むことを主張したのは、西川長夫であった。

西川はまず、「『真空地帯』を再読して、私は作品の幸運と不運についてあらためて考えざる

をえなかった。共産党内の分裂を背景にもった論争の渦にまきこまれたことが作品の将来に暗い影をなげかけていたことは否定できない」（「解説」『野間宏作品集2』岩波書店 1988年）と述べ、前節で見たように、本作品が1950年代の共産党分裂問題の渦中にあった不運を指摘する。しかし、「『真空地帯』をくりかえし再読して私のえた結論は、『真空地帯』はまれにみる幸運な作品であるということであった。じっさい『真空地帯』は作家の成熟と時代の要求とが、ぴったりと一致した時点で生みだされた幸運な作品であり、そしてさらに重要なことに、その幸運の明らかなしるしを全身におびた作品である」（同前）と、作品発表時の不運を乗り越えてなお余りある本作品の豊饒さを高く評価する。そして、その幸運のしるしを、作品を形作る文体そのものに見出していくのである。

西川は、『真空地帯』の本文を声に出して読むことを推奨しており、音として感じ取られる躍動感に注目するべきであることを強調する。西川が具体的に掲げているのは、例えば次のような作品の叙述である。

馬場を六周してふたたび厩の近くのまがり角のところに来たとき、群福はもう全く速度をおとしてしまった。みるみる木谷はそれに追いつき、距離をちぢめた。すると彼の全身はまるくふくれて、弾んだ。木谷はまがり角のところで馬を外側に向けて、おいぬいた。

「曾田はん……ぬいてしまうぜ。……」木谷は言って左側の曾田に笑いのひろがった顔をふりむけた。

「ああ、とうとう、やられてしまいやがった。」曾田は顔をあげて大きな声で言った。彼もまた笑っていた。木谷はまた大きく鞭を使って全身を前へおとした。彼はしばらくしてもう群福が自分の後を追うてこないということに気づいたが、そのまま拍車を入れつづけぐんぐん速度をのばして一周した。彼は自分の身体が快く伸びるのを感じた。ああ、彼の身体をつつむのは海の風だ……そして幼年時代が彼のうちのどこかでばくはつしているかのようだった。（引用者注－傍点は西川に拠る）

西川は、作品に溢れるこうしたエネルギッシュな文体に注意を促すとともに、西川自身が傍点を付した部分をより強調して、ここに既存のリアリズムとは異なる表現主義的な記述の特徴を読み取っている。

同時に西川は、「野間宏の理論と実作の特色の一つは、個人の肉体にたいする執着とその描き方にある」（『日本の戦後小説』岩波書店 1988年）と述べ、続けて「彼（引用者注－野間）はしばしば内的な感覚について語っています。また彼の文体が示しているように、彼は肉体や内部器官によって思考します。それはあたかも真の革命は頭脳のイデオロギー的な変化ではなく、人間の肉体の諸器官や内的感覚の変化であることを主張しているかのようです。じっさい彼は、日本人の肉体は天皇制の抑圧のもとでねじれてしまっていると主張しました。したがって彼によれば真の社会的な解放とは、何よりもまず肉体の解放であり、肉体における根本的な変革を伴わない革命は無意味であるということになるでしょう」（同前）と指摘する。「暗い絵」（『黄蜂』1946年4・8・10月）や「崩壊感覚」（『世界評論』1948年1～3月）から『真空地帯』へ至る過程で野間が強いこだわりを持っていた個人の肉体そのものの感覚に着目しながら、身体の内

なる即物的な感覚をこれまでにない新たな表現で活写することに、西川は世界を変える可能性を見出しているのである。

発表当時のコンテクストから作品を一旦切り離し、作品の表現そのものを吟味して、それまでの戦後文学表現にはなかった新たな感覚を捉え、それを即物的な肉体のレベルで理解しようとする西川の読解は、『真空地帯』研究を一步先へと進展させるものである。さらに、発表時の同時代コンテクストによる軛から作品を解き放ち、文学表現の強度そのものを捉えようとする西川の姿勢は、『真空地帯』を今、現在において読むことの意義を問うものでもあった。

『真空地帯』のアクチュアリティとして西川が示唆していたのは、現在における軍隊の問題である。作品発表時において野間は「日本の軍隊とフランスの革命後の軍隊とは、いずれもその国家権力の主要な内容をなす特殊な団体であることにかわりないが、日本の天皇制国家権力とフランスの国家権力（いろいろあるが）の性格のちがいにしがって、その性格をことにする」（「日本の軍隊について」前掲）と述べていたが、西川はこれを敷衍しながら、軍隊の質的差異を認めフランス革命軍と日本軍との区別を行っていることに対して、そのような差異化は無効であり、軍隊は軍隊である以上、おしなべて人間を抑圧するものであると批判する。

憲法で戦争放棄を宣言した後に、軍隊ではなく自衛隊をもつというわが国の自己欺瞞的な歴史は、われわれに軍隊の本質、しがって国家の本質をおおいかくすように作用し、その結果として世界の現状についてのリアルな認識と判断をさまたげている。「日本の軍隊について」に触発され、ここで解説者の役割をいくらか逸脱して私見を述べることを許していただけるならば、私はこの論文における社会と国家の区分、さらには国家における軍隊の特殊な役割についての記述を、軍隊論のいまも正しい出発点と認めた上で、フランス革命の軍隊や民主主義的な国家、あるいは社会主義的な国家の軍隊が解放的であると考えるのは、本質的に間違っていると思う。フランス革命の解放的民主的軍隊がただちにナポレオンの帝国軍隊に変質し、後には植民地支配の道具となったように、あるいはアメリカの軍隊がベトナムで、ソ連の軍隊がアフガニスタンでその本質をさらけだしたように、戦後四〇年の歴史は、良い核兵器がないと同様よい軍隊はなく、よい軍隊がないと同様よい国家も存在しえないということを証明している。国家の安全のための組織が、ついに世界の安全を破壊するに到るという事態にいまわれわれは直面しているのである。廃棄すべきものとしての軍隊、これこそ『真空地帯』が書かれ、そして今なお訴え続けている現在の問題であろう。

（西川長夫「解説」前掲）

西川の考えでは、軍隊は人間の精神とともに肉体をも一定の鑄型にはめ込んで戦争の道具に作りかえていく場所であり、そこには野間が想起したような善悪の区別など存在しない。その上で西川は、鑄造装置である軍隊に同化することができなかった作品の主人公木谷に注目し、「木谷の本質はついに軍隊の典型的人物になりえなかった点にある」（同前）と述べる。西川に拠れば、「木谷は曾田が疑っていたような反逆思想の持主ではなく、ましてや革命家ではない。しかし軍隊や国家の圧力をもってしてもどうしても矯正しきれないものが彼のなかにあって、それが彼

を犯罪者とし、ヒーローとしているのだ。その意味では、木谷に思想犯を見ようとする曾田よりも、国家観念の欠如した「極悪不逞な兵」という検察官の主張の方が木谷の真実をついている」（同前）という。西川は、組織からはみ出す木谷の存在そのものに、軍隊を相対化する契機を読み取っている。さらに、決して矯正され得ない木谷の肉体に国家観念の欠如を見出し、そこに国家そのものを批判し得る可能性を見出していくのである。

ここで興味深いのは、西川長夫と野間宏が『真空地帯』という一つの小説をそれぞれ、真逆のベクトルから把握していることである。野間は、前述したように、『真空地帯』によって抵抗のナショナリズムを喚起し、国民を組織化していくことを考えていた。一方、西川は、作者の意図やコンテクストを括弧に括ることで、この作品が国家を存立させるための国家装置の中核である軍隊への批判的認識を通して、ナショナリズム、あるいは国民国家そのものの批判・抵抗へと読者を誘うものであると考えているのである。

軍隊とは、ルイ・アルチュセールが定位するように、国家が保持する抑圧装置の最も中心にある組織である。アルチュセールは、「国家の中核は、その抑圧装置である。これは当然、「何にでも耐えうる」力と抵抗力を備えている。／この中核の核心を構成するのは、抑圧のための準軍事組織（警察、機動隊、等々）と軍隊（ならびに、助けを「求められる」やいなや、即座に国境を越えてくる友好帝国主義諸国の軍隊）である。これは、それが支配階級にとって最後の論拠、すなわち純粋な暴力という最終的論拠 *ultima ratio* であるという点で、究極的な核であり「最後の砦」である」（『再生産について』西川長夫他訳 平凡社 2005年）と述べている。そして、人間はこの抑圧装置によって機能を保障された様々な「国家のイデオロギー諸装置」（同前）によって国民化されていくのである。

しかし、西川は「われわれの内部と周囲に張りめぐらされた国家への無数の回路は、それを逆にたどって国家の外に出ることを可能にする回路でもありえた」（『国民国家論から見た「戦後」』『国民国家論の射程〔増補版〕』柏書房 2012年）と考え、「国民国家は実に巧妙に作られた人工的な機械であり、その強制力は圧倒的ですが、われわれは国家に回収される瞬間においても必ずしも全面的に回収されているわけではなく、なにがしかの違和感や反発を抱いていたのではないのでしょうか」（同前）と述べている。これは、『真空地帯』の木谷の身体に生じた肉体的抵抗感を、国民国家の外部へと至る通路として掘鑿する可能性を示唆するものである。

軍隊への反抗心を抱き続け、典型的な兵士となり得なかった木谷は、兵営の中で単独行動を取り、自分を陸軍刑務所に送った上官に復讐する機会を窺っていた。また、監獄帰りを揶揄され激怒した際には、班内の序列など関係ないと言わんばかりに、班員全員を整理させ、一人ずつ、自分より階級が上である上等兵であっても殴り倒していく。軍の規則・慣習に従わない木谷は、国民化の鑄型に嵌まらない不良品である。そのような木谷の存在は、軍隊を通した国民化に抗う主体として捉えることができるだろう。木谷は、真空の強力な陰圧によって国家の中心へと吸い寄せられていく場であって、逆向きの回路を辿っている。『真空地帯』は、そうした木谷の在り方を描くことで、作者の意図を超えて、そして発表時の評価をも超えて、現在において軍隊や国民国家、ナショナリズムを批判するインパクトを備えたアクチュアルな作品として在るのである。

6. 裂け目、を照らし出す光源

以上のように、本稿では、『真空地帯』が喚起する問題を振り返りつつ、西川長夫が看取した作品の現在性について再考してきた。西川は、兵営内部をありのままに活写する『真空地帯』の表現の中に、軍隊および国民国家の本質的な様相を読み取り、そこから逸脱する主人公木谷の肉体に国民化の回路を遮断する可能性を見たのである。国家や軍隊の陰圧によっても除去できない木谷の「人間ノ要素」・「人間の自然」を、西川は暗黒一色に塗りつぶされた作品世界の希望の光として捉えている。

最後にさらにもう一つの逆説をつけ加えれば、この『真空地帯』と題された逆ユートピア小説は、その世界が暗黒一色に塗りつぶされているだけに、曾田や木谷や染の友情、さらには花枝の愛が実に強い輝きをもって印象づけられる。船底で語られる木谷と花枝の幼年時代、ようやく木谷の胸に収められた花枝の写真は、「真空地帯」のどこまでも伸びてくる暗い影を吹き払う輝きと魔力をおびているかのようだ。『真空地帯』はその本質において決して暗く陰湿な作品ではなく、幸福への強い願望によって明るく輝く光源を宿した作品である。

（西川長夫「解説」前掲）

では、西川の議論をさらに敷衍することは可能だろうか。本稿は最後に、国民国家批判論を踏まえた『真空地帯』解釈を基に、西川が示唆するに止め、具体的に言及しなかった作品表現の意義を確認して擱筆とした。

前節で見たように、西川は『真空地帯』の主人公木谷の兵隊として典型化され得ぬ逸脱した肉体に、国民国家を批判する契機を読み取っていた。しかし、木谷は単なる無法者ではない。一定の側面において、木谷は典型的な帝国陸軍兵士でもあった。

例えば、作品の中で、田川・安西という二人の初年兵（学徒兵）が夕食の汁をひっくり返す事故を起こす場面がある。二人の初年兵は上等兵に殴り倒された後、班内の兵隊全員に一人ずつ許しを乞うて回るように命じられ、木谷のもとへやってくる。その時、許しを乞いにくる二人の姿に木谷は苛立ちを露わにするのだが、その場面は次のように描かれている。

彼等は木谷のところへはらばいながら近づいて行った。然し、木谷には彼等のそのようなのろした匍いぶりが不思議だった。さらに、「上等兵殿、もういたしませんから、今日はこれでお許し下さい」と途中で膝でたつた安西二等兵の苦しげに歯をくいしばった様がたえられなかった。古い教育を受けた木谷にはこれが一体兵隊なんだろうかというような気がした。

木谷はこれら二人の頭を床の上におしつけて、ごんごんいわせてやりたいと思った。彼等の泣き声は彼の憎しみをかきたてた。

木谷は他にも、班長の吉田軍曹と初めて対面した時、顔にクリームを塗り、もみあげにそり

込みを入れたその面を一瞥しただけで「彼は軍隊のあそび人だ。なまけものだ」と判断し、「軍隊にはときどきこのような訓練とはもっともかけはなれた人間がいる」と述懐しながら軽蔑の目を向けている。木谷は、兵営という閉鎖空間を打ち壊すならず者として形象されているが、同時に初年兵たちのような情けない姿を恥じ入ることもない兵隊を心底から嫌悪するほどに、そして兵隊にも関わらずめかし込んでいる軍曹を蔑視するほどに、軍隊の威厳と規律を内面化した兵隊なのである。つまり、木谷は、単に国家観念の欠如した「極悪不逞な兵」ではなく、一面では兵営の情調を肉体の奥底まで内在化してもいる分裂した主体として存るのだ。

同じ事はもう一人の登場人物である曾田にも当てはまる。一等兵ながら兵営の中で上手く立ち回り、軍隊の規律に順応しているかに見える曾田もまた、次に示すように、軍服の下に隠れた自身の肉体と、軍服の表面に現れる自己との乖離を感じずにはいられないでいる。

曾田の足をしばっているのは、歩兵操典の条文であり、曾田の眼をしばっているのは陸軍礼式令の条文だった。彼の眼はたとい一人の上官をも見落すことがあってはならなかった。(中略) 曾田の時間、空間は条文のなかにあった。(中略) 曾田は自分の軍服と軍帽と巻脚絆の下に、自分をもっている。それが彼の自分だ。大学を卒業して教員になり経済学と歴史学を勉強して生きてきた自分だ。この服の下、襦袢の下にその自分があるのだ。しかしその自分のなかへ行くことはいま彼にはできはしない。……曾田と軍服の下の自分とをへだてているものがある。そしてその向うに彼はいるのだ、その向うに……。軍隊の多くの條令がこの服のようにこの曾田の自分の上にくもの糸のようにまつわりくい入り、それを曾田からとおくへだててしまう……。さっき公園でみかけた二人の職人風の男、あのペロペロのスフの国民服をさむそうに風に動かしていた男たちも、明日召集にあうならば、兵営の鉄の柵をこえて向う側からこちら側へつれてこられる。すると彼等の体は襦袢と袴下とにしっかりつつまれ、彼等のもっている自分をとおくの世界へやってしまう。自分はそこにいる。その向うに。うめき声をあげてその向うにいる。

曾田は、兵営の規律を内面化しながらも、それに完全に同一化できない自己の肉体のうめきを抑圧しながら「真空地帯」の中で生きていかざるを得ない。このように人間を兵隊という一定の形に铸造していく装置として捉えるだけでなく、人間の肉体を引き裂き一定ならざる不安定な主体として留め置く場として、軍隊あるいは兵営を捉えることができるのではないだろうか。この分裂する肉体の様相に注目してこそ、国民国家の回路に備わる双方向性を理解することができるかと本稿は考える。

もちろん、そこに見出されるのは絶望的に不幸な肉体として在らねばならない主体であるだろう。だが、その暗黒の場に踏みとどまることによって、黒一色に塗りつぶされた世界の中で、僅かに光る光源を見付けることができるはずである。そこには、曾田のように、うめき声を挙げながら苦痛に苛まれる肉体があるだけかもしれない。けれども、曾田が自身のうめき声によって改めて自己を再発見したように、痛覚を再び刺激しないことには、痛みを痛みとして感じ得ないほどに国家の抑圧装置やイデオロギー諸装置に訓練され、国民化された肉体は覚醒しない。

木谷や曾田に痛みを伴って顕れた肉体の裂け目は、国民国家の裂け目でもある。日常化した

痛みの反復によって、時に見失いそうになるその裂け目の在処を、『真空地帯』は今もなお、照らし続けているのである。

注

- 1) 論争の主要文献については、白井吉見監修『戦後文学論争 下巻』番町書房 1972年所収の「『真空地帯』評価をめぐる論争」を参照されたい。
- 2) 国民文学論争については、拙著『国民文学のストラテジー』双文社出版 2014年を、また、野間の国民文学論については、拙稿「野間宏の抵抗と革命」（『社会文学』2011年2月）を参照されたい。

[附記] 資料の引用に際しては、旧字を新字に改めた。また、断りのない限り、原文にあったルビ・傍点等は省略した。引用文中の「／」は原文での改行を示す。引用・参考資料名の副題は全て省略した。

